

三章 新天地を求め<sup>もと</sup>て

# 1 戊辰戦争に敗れる

伊達邦成は、天保十二（一八四二）年、岩出山伊達家の伊達義監の次男として生まれました。



伊達邦成

岩出山伊達家は、亙理伊達家と同じく伊達家一族の一門で、初代の当

主は政宗の四男でした。

その領地は、現在の宮城

県大崎市の一部にあたり

ます。

邦成が五歳のときに父

が亡くなり、岩出山伊達

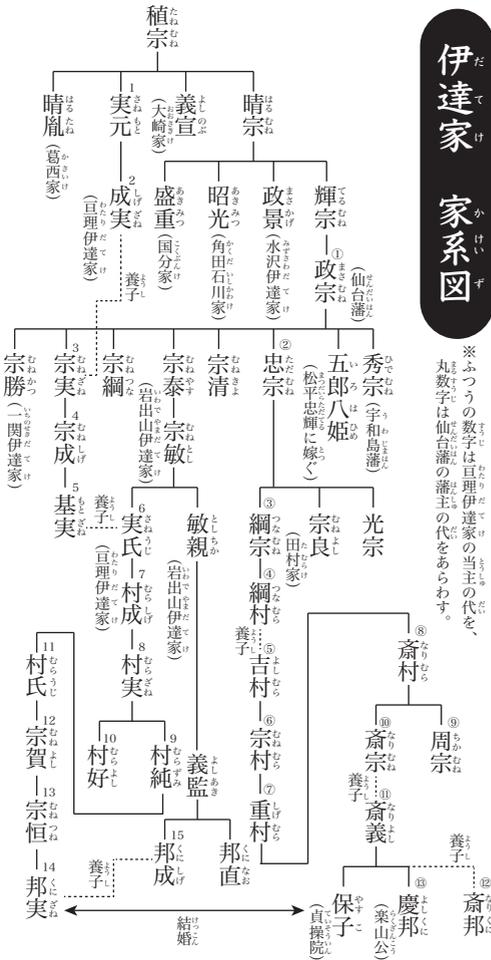
家は兄の邦直が継いでい

ました。

そこで、次男である邦成は、巨理伊達家十四代当主・邦実が亡くなつたため、そのむこ養子となりました。こうして、十九歳のときに、巨理伊達家を継ぐことになったのです。

## 伊達家系図

※ふつうの数字は巨理伊達家の当主の代を、丸数字は仙台藩の藩主の代をあらわす。



このとき、邦成をみずからの養子にむかえ、義理の母となったのが保子でした。保子は、仙台藩主の伊達慶邦の妹ですが、十七歳で邦実と結婚し、巨理伊達家に入りました。幼いころから賢いだけでなく、思いやりにあふれた女性だったといえます。

夫の邦実が若くして亡くなると、保子は出家して「貞操院」と名乗ります。巨理の人びとは、貞操院を心から敬愛していました。邦成もまた、新しく母となったこの女性を実の母のようにしたい、大切にしました。



伊達邦成が巨理伊達家の当主となり、保子が貞操院と名乗った安政六（一八五九）年。

江戸では、前年にアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスと結ばれた「安政の五か国条約」をめぐり、幕府への批判が高まってきました。

幕府の長老・井伊直弼が、諸外国の強い姿勢に押され、天皇の許しを

得ぬまま、条約を結んでしまったからです。

そのため、この条約によつて貿易が始まることに慎重だった天皇のはげしい怒りを買うことになります。

「異国の圧力に屈した幕府の弱腰たるや、なんたるものぞ。これ以上、幕府にこの国をまかせておくことはできぬ」

このような幕府への批判が高まるなかで、ときの仙台藩主・伊達慶邦は、安政の五か国条約が結ばれるまで、

「外国と交易を拒絶して、軍備を充実すべし！」  
と、はげしい意見をあらわしていました。

しかし、外国との間で条約が結ばれてしまつてからは、

「外国と条約を結んだ以上は、理由もなく戦争をしかければ、道義に反する」

と、過激な意見とは、ちがう立場を示しました。

幕府の動きを冷静に見つめた慶邦ら仙台藩のおもだった人びとは、幕

府の力がおとえていて、いずれは滅びるのではないかという考えを持っていたといえます。



薩摩藩（島津氏）や長州藩（毛利氏）などを中心に幕府を倒そうとい

う機運が高まっていた慶応三（一八六七）年。

十五代將軍の徳川慶喜は、突然、朝廷に政権を返上すると発表し、江

戸幕府は終わりをむかえました。大政奉還です。

そして、慶喜は新しい政府への参加を許されず、その領地も大きく減

らされてしまいました。

これに怒ったのが、それまで幕府の政治をささえてきた大名をはじめとする、幕府の家来たちでした。

さらに、明治元（一八六八）年一月。

新しい政府の形を天皇と相談するために上京していた旧幕府軍の主力と、薩摩藩・長州藩を中心とする新政府軍が、京都の南にある鳥羽と伏

見で衝突し、戦いの火ぶたが切られました。

直理伊達家の運命を大きく揺るがす、戊辰戦争の始まりです。

鳥羽・伏見の戦いでは、兵力がおとるにもかかわらず、新政府軍が戦いを有利にすめました。

新政府軍は、徳川慶喜を朝敵（天皇の敵）と定め、官軍（朝廷の軍隊）となつて慶喜を討つように命令を出します。

そして、慶喜が逃げ帰った江戸城をめざして、関東地方へと攻め上つていったのです。

鳥羽・伏見の戦いの直後、仙台藩にも、旧幕府に味方する会津藩（松平氏）を攻めるようにという、新政府軍の命令が来しました。

「朝廷の命令であれば、会津を討たなければなるまい」

「いや、会津がどのような罪を犯したのかがはっきりしないのに、攻めるのはおかしいではないか」

このとき、仙台藩の中では意見が分かれ、はじめ兵を出しませんでし

た。そして、新政府側の意向にしたがい、会津藩が降伏するよう、説得に努めました。

ところが、会津藩はなかなか降伏を受け入れません。

「これ以上、会津への出兵を引きのばせば、わが藩が朝廷にそむいたという責めを受けるやもしれぬ」

仙台藩主の伊達慶邦はそう考え、やむなく会津の攻撃を命じました。

このとき、巨理伊達家の伊達邦成はみずから千八百の兵をひきい、米沢（山形県）に近い湯の原というところまで形だけの出陣をしました。



ところが、仙台藩は引き続き、会津藩の説得をあきらめてはいませんでした。

仙台藩の中では、新政府に対する不満や不信感から、会津藩に同聲する声が根強かったからです。

「会津を攻めほろぼせ」という命令は、薩摩や長州などが東北地方をうば

おうとする陰謀にちがひあるまい」

「もし、会津がほろびるようなことがあれば、明日はわが身。今こそ、

東北地方の各藩が力を合わせ、薩摩と長州の力を封じなければなるまい」

やがて会津藩を助け、戦いを止めるために、仙台藩や米沢藩（上杉

氏）などを中心に、二十五にもものぼる東北地方の藩が手を組み、「奥羽

列藩同盟（やがて奥羽越列藩同盟となる）」が結ばれました。

この同盟は、会津藩と庄内藩（酒井氏）に対する許しを、朝廷に直接

願うための謝罪嘆願書をさし出しました。

ところが、許しを得られないことが明らかになると、同盟は次

第に新政府軍と対決する姿勢を強めていきます。

関東地方の旧幕府軍を平定した新政府軍は、この同盟に対して強い態

度でのぞみます。そして、ついに白河口（現在の福島県白河市）などか

ら、同盟側を攻撃したのです。







仙台藩をはじめ、同盟側の各藩は奮戦しましたが、次々と敗れて、降伏していききました。

そして、会津藩による、一か月にもわたるはげしい籠城戦が若松城でくり広げられ、有名な白虎隊の悲劇が生まれました。

そんなさなか、ついに九月、仙台藩も降伏を決意し、やがて会津藩と庄内藩も降伏します。

仙台藩の降伏式は、亘理でおこなわれました。

それでも、榎本武揚ひきいる旧幕府の海軍は、最後まで新政府に抵抗しようとする残党ら二千名ほどを艦隊に乗せ、最終決戦の地・箱館へと向かったのです。



仙台藩が降伏するのに大きなはたらきをしたのが、伊達邦成と常盤顕允でした。

常盤顕允は、天保三（一八三二）年に岩城国亘理郡小堤村（現在の宮

城ぎ県けん巨わたり理ち町ちやう）で生まれました。当とう主しゆの伊だて達てく邦くに成しげよりも九さい歳さい年ねん上じやうです。

その先せん祖ぞは、平へい安あん時じ代だいの征せい夷いたい大たい将じやう軍ぐん・坂さか上かう田た村むら麻ま呂らといわれ、常とき盤わ家けは、代だい々だい、巨わたり理だて伊だて達だて家けの家か老ろう（家け来らいの長ちやう）をつとめる家いえ柄がらでした。

顕あき允まさは、少しょう年ねん時じ代だいはおとなしくまじめ一方いつぱうでしたが、文ぶん武ぶ両りやう道どうの英えい才さいで、劍けん術じゆつは小おの野の派はい一いつ刀とう流りゆうを、槍やりは宝ほう藏ざう院いん流りゆうを修しゆ行ぎやうしました。

そして、二に十じゆ七しち歳さいのときに、当とう時じの当とう主しゆ・伊だて達てく邦くに実じねから特とく別べつに選えらばれ  
て江え戸どにあがり、幕ぼく府ふがつくつた昌しやう平へい坂さか学がく問もん所じよで数すう年ねん学がくびました。

このころ、大おほ橋はし訥とつ庵あんという兵へい学がく者しやに兵へい法ほうを学がくびます。

やがて、国くにもとにもどつた顕あき允まさは、巨わたり理だて伊だて達だて家けの家け来らいとして活かつ躍やくし、  
父ちちのあとを継ついで家か老ろうになりました。

若わかい当とう主しゆの邦くに成しげにとつては、顕あき允まさはたよれる存そん在ざいでした。



奥おう羽う越えつ列れつ藩ばん同どう盟めいの軍ぐんが次つぎ々つぎと敗やぶれていくなか、邦くに成しげと顕あき允まさのふたりは、  
「このまま敗やぶれれば、仙せん台だい藩はんはおとりつぶしになつてしまふ。何なんとか有ゆう

り  
利な条件で戦いを終わらせることはできないものか」

と考えます。

そこで、敵である新政府軍の陣地に家来を送り、仙台藩が朝廷にそむく意思のないことなどを伝えて、何とか有利に降伏できるように、はたらきかけました。

そうした努力がみのり、降伏してからも、仙台藩はとりつぶされずにすむことになりました。

しかし、仙台藩の領地は、六十二万石から二十八万石にまでけずられてしまいました。亙理や白石など、その南側の地域は盛岡藩の南部氏の領地となりました。そして、邦成には、五十八石のみがあたえられることになりました。

さらに、仙台藩主の伊達慶邦は隠居をせまられました。

かわって藩主となった伊達宗基は、まだ三歳だったため、邦成がその後見役としてサポートすることになりました。

## 2 北海道移住を願う

領地を大きくけずられた仙台藩の人びとは、自分たちの先行きに大きな不安をかかえることになりました。

巨理伊達家の石高は二万四千石ほどありましたが、わずか五十八石(米百三十俵の支給)とされてしまったので、もとの四百分の一以下に石高を減らされたことになりました。

巨理伊達家には、家来とその家族を合わせて七八五四人がいます。とても、この人数を養つていける収入ではありませんでした。

石高を減らされた仙台藩でも、邦成の家来のような「家来の家来」をめしかかえる余裕はなく、こうした事態に心配の声があがります。

そこで、仙台藩は重臣たちによる会議などを開き、新政府に願ひ出ました。

「家臣とその家来たちは旧領地にとどまり、荒れ地を借りて農業をいとなませたい」

この願い出に対して、新政府の回答は、次のようなものでした。

「武士をやめ、盛岡藩の農民か商人となるのであれば、願い出を聞きとどけよう」

つまり、邦成の家来たちが旧領地にとどまるとすれば、何の関係もない盛岡藩に、先祖代々の土地や家を明け渡したうえで、税をおさめなければならなくなるのです。

しかも、武士ではなく、農民や商人としてです。

武士にとって刀を捨てることは、たいへんな屈辱でした。

ましてや、先祖代々つかえてきた亙理伊達家の家来でもなくなり、邦成との関係が失われることなど、考えようありません。

生きていくために恥をしのんで農民や商人となり、よその藩の支配を受けるという選択肢など、ありえませんでした。

そのため、邦成の家来たちは、おおいに頭をなやませました。

◆  
そんな、ある日のこと。

伊達邦成のもとに、家老の常盤頭允がやってきました。

「殿、急ぎ大事なお話がございます。どうか、お人ばらいを」

頭允の目には、なにやら強い決意がこめられています。

これは、ただことではないと感じた邦成は、すぐにまわりの者を部屋の外に出し、ふたりきりになりました。

「頭允、続けよ」

「殿、われらは、今や未曾有の危機にひんしております。このまま、ここにとどまっては飢えるか、農民となるのみ。これを通り切るには、思い切った血路を開かねばなりません」

「なにやら策でも浮かんだのか」

「聞くところによれば、新政府は蝦夷地を開こうと計画しているとのこ

と。われらも家来たちをひきいて自費で蝦夷地におもむき、北方の警備をしながら、新たな土地を切り開くことにより、家来たちを養つては、いかがでしょう」

その手があつたかとはばかりに、邦成の目は大きく開きます。

ところが、邦成は、すぐにうつむいてしまいました。

「それは、たしかに妙案。しかし、わが亘理伊達家は、先の戊辰戦争でたくわえのほとんどを使い果たし、今や日々のくらしにも困つておる。

自費といつても、そもそも蝦夷地の開拓はもとより、移り住むのにも多くの元手が必要になる。今のわが家には、そのような思い切つたことをできる費用はないのだ」

頭允はそのことを待つていたかのように、熱意をこめて邦成に語りました。

「殿のご心配は、ごもつともでございませす。しかし、わが亘理伊達家には、たくわえはなくとも、忠義にあつた家来たちとその家族七千八百人

あまりがおるではありませぬか！ これこそ、何よりの元手にほかなりません」

「しかし、蝦夷地は、まだまだ未開の地と聞くぞ。家来たちは、そのようなところにまで、わたしとともに来てくれるであろうか」

かつて仙台藩は二度にわたり、家来を蝦夷地に送ったことがあります。

一度目は文化五（一八〇八）年。択捉・国後・箱館に計二千人以上を送りました。二度目は安政元（一八五五）年。白老から知床岬までの地域と、択捉島・国後島の警備を幕府から命じられました。

当時、巨理伊達家の当主となったばかりだった邦成は、資金不足の仙台藩がどれほど困ったのかを、よくおぼえていました。

また、仙台藩は、警備するにあたって、蝦夷地のことについて調べたり、情報を集めたりしていたのです。

「何を弱気なことをおっしゃいますか。みな、殿に忠誠をちかい、先の戦も必死に戦った忠義の者ばかり。殿みずからがおもむくと聞けば、ど

「こまでもついでに行くに決まっております」

「だが……」

邦成は、多くの家来とその家族をかかえる当主としての責任から、蝦夷地への移住・開拓という顕允の大胆な提案に、なかなか応じることができませんでした。

しかし、顕允もまた家老として、亘理伊達家の家来たちの行く末を考へに考えたうえで、提案していたのです。

「殿。みなは、住む家も食べるあても、刀すらも失ってしまうのですぞ。蝦夷地の開拓よりほかに生きる道がないとなれば、決死の覚悟でやってくれましょう。しかも、北方の警備は古くから武士の本分であり、名誉なことでもあります。北方の警備と開拓がうまくいけば、朝敵の汚名も返上できるかもしれませぬ」

今のまま亘理の地にとどまるよりも、みずから蝦夷地の開拓におもむくことで、多くの可能性が開かれる。

そのようにうったえる顕允の説得力に、邦成はついに決心しました。「あいわかった。そなたの決心を信じよう」



巨理伊達家の家来とその家族七千八百名あまりの生活がかかった蝦夷地開拓という大事業。

常盤顕允は、それが成功するかどうかの可否を一手にまかされた責任の重さを感じながら、東京へおもむき、新政府に移住の許しを願います。東京は、江戸から名を改め、日本の首都となったばかりでした。

明治二（一八六九）年五月、東京で顕允は、新政府の参議である広沢真臣（広沢兵助）を通して、新政府にはたらかけをおこないました。

参議とは、当時の新政府でもっとも政治力のある役職でした。

広沢参議は、長州藩の出身でしたが、戊辰戦争では会津藩への寛大な処置をのぞみ、巨理伊達家にも協力的な人物でした。

こうして巨理伊達家の移住の願いは、順調にいきそうに思われまし

た。

ところが、肝心の仙台藩からの許しが、なかなか下りませんでした。頭允の東京での行動が、仙台藩の意向を無視したものであると問題になつたのです。

結局、最後まで仙台藩から蝦夷地開拓の許しが出ることはありませんでした。



同じ年の八月。頭允のはたらきかけがようやく実を結び、当主の伊達邦成を東京の民部省へ呼びよせるようにというお達しがありました。

民部省は、当時の国内政治の全般をつかさどっていた役所で、北海道と名を変えたばかりの蝦夷地の開拓も担当していました。

さつそく邦成が民部省に行くと、次のような辞令を受けました。

「北海道の開拓は現在の急務である。政府でもおいおい開拓に着手することと思うが、あの広大な大地を一度に着手するわけにはいかない。そ

なたたちは困難をかえりみず、みずから彼の地の開拓を志願するとは、まことに感心である。自費で移住し、必ずや成功するよう力を尽くすように」

ついに、巨理伊達家による北海道の開拓事業が、新政府に認められたのです。明治二（一八六九）年八月二十三日のことでした。

さらに、その二日後。

「胆振国のうち、有珠郡の支配をおおせつける」

という政府の辞令もありました。

邦成も、顕允も、この「有珠郡」については、くわしく知りませんでした。かつて、仙台藩が警備を担当していた地域にも、有珠郡は入っていませんでした。

実は、邦成たちは、沙流や新冠の地を開拓したいと願っていたのです。

なぜなら、仙台藩が警備していた土地の中でも、広大な平野が広がっていて開拓もしやすく、海や川には魚介類も豊富だということを知って

いたからです。

「しかし、決まった以上は、有珠郡を新天地として開拓にはげもう」  
ふたりは、そのように深く心にちかいました。

同じころ、仙台藩内の白石をおさめていた片倉家と、角田をおさめていた石川家からも、北海道開拓の願いが出されていきました。

両家は、それぞれ片倉景綱と石川昭光を初代とする仙台藩の重臣で、両家とも、巨理伊達家と同じような立場に追いこまれていきました。

片倉家は幌別郡（今の登別市）、石川家は室蘭郡（今の室蘭市）の支配と自費による移住が命じられました。その後、岩出山伊達家も移住を願ひ出て、空知郡（今の当別町）の支配と移住を命じられました。

巨理伊達家のように、多くの仙台藩の家来たちが、北海道を新天地と考えたのです。

「これから始める移住や開拓の仕事は、すべてそなたにまかせる。ほかの者には口出しをさせないから、しつかりやってくれ」

というところで、伊達邦成は、さっそく常盤顕允を有珠郡の開拓執事に任命しました。顕允は、眉根をぎゅつとよせて答えます。

「一命をなげうつてでも、この大仕事を成功させてみせましょう」

顕允は、常磐の姓を田村と改めることで、その決意を示しました。

やがて邦成は亘理にもどり、開拓執事となった田村顕允は、そのまま東京に残ります。

東京を離れることになった邦成は、見送りに来た顕允に言いました。

「顕允には一日でも早く函館に向けて出発し、有珠郡の受け取りの手続きをすませておいてほしい。そのためには、船を見つければならぬ」

「承知いたしました。有珠郡受け取りのことは、この顕允におまかせくださいますよう」

「顕允であれば、安心だ。わたしは亘理にもどり、すぐに、みなに北海

道への移住の許しが出たことを伝える。そして、出発の準備にとりかか  
るつもりだが、七千人以上の家来とその家族を一度に移住させるのは難  
しいであろう。いくつかの組に分けて出発せねばなるまい」

「さようでございますな」

「どのように移住の組を分けるかは、家来たちと相談して決める。元手  
も、なんとか用意せねばなるまいから、移住には少し時間がかかるやも  
しれぬが、次はかならずや北海道で会おうぞ」

「はい。いずれ、かならずや」

こうして、まずは田村顕允が先行して、北海道へと向かうことになっ  
たのです。